

独歩「窮死」論

— 小民史 — の 帰 結 —

岩 崎 文 人

国木田独歩の最晩年の作「窮死」は、明治四十年六月「文芸倶楽部」に発表されたものであるが、発表当時の評価は、「悲惨なる而も避け難き運命の手に攫まれて、死の谷に駆りやられる人の運命を描いたもので、例の如く人をして一種或るものに触れしむるものである」(「趣味」明40・7)といった好意的な批評が一部あるものの、独歩自ら『窮死』一編は左迄世評に上らざりしも、余は最後の一句たる『どうにも斯うにもやりきれなくて倒れた』云々の言を「趣味して貰ひたしと思へり」(「病床録」明41・7)と語っているように、必ずしも芳しいものではなかった。

たとえば、「文章世界」(明40・7)は、主人公である文公の「死に到る径路が明瞭でない。肺病ではあり、働けはせず、生きてゐれば仲間の厄介になるばかりだからといふのであらうが、単にそれだけでは余りに平凡だ。平凡は難がないにしても、余りに唐突であるといふ誹は免がれない。悲惨が悲惨に響かぬのが第一の欠点。」と、文公の死の必然性に難があると批判し、「新潮」(明40・7)は、「結末、弁公の老爺の死様なぞは随かに無理だ、小細工だ。」と文公の仲間である弁公の父の横死が小細工に過ぎぬと一蹴している。

ただし、この期の作品がすべて否定的な評価を受けたというわけではない。「竹の木戸」(明41・1)、「二老人」(同)などはむしろ高い評価を得ている。こうした評価の分岐は、今日から見れば、当時の文壇の動向そのものにあつたといつてよい。つまり、当人の思ひとは無関係に、独歩を自然主義作家とみなした文壇の尺度による。自然主義作家というレッテルを貼られた独歩が、「余と自然主義——付たり不思議の現象——」(明40・10)、「不可思議なる大自然——ワーズワースの自然主義と余——」(明41・2)などにおいて、いささかとまどいぎみの表明をせざるを得なかつたのも、この間の事情をよく表している。

時代が下つての「窮死」の評価も、おおむね否定的であつた。その代表的なものは、おそらく、『座談会明治文学史』(昭36・6)における勝本清一郎氏の発言であらう。そこで氏は「明治四十年四月の破産以後に書いた『疲勞』とか『窮死』とか『二老人』とか『竹の木戸』とか、(中略)みな油っ気がなくなつてしまつています。この期の傾向は別の人々がそれを受け継いで発展させますよ。独歩自身作品としては油っ気がなくなつて、解体しかけたものとして、というふうには僕は見えています。」と言ふ。同席者の平野謙氏もこの発言に賛意を示し、猪野謙二氏は、勝本氏が明治三十五、六年の作

品、たとえば「酒中日記」「運命論者」「女難」「正直者」などを高く評価しているのに対し、初期作品の「武蔵野」(明31・1~2)あるいは「牛肉と馬鈴薯」(明34・11)などを特に挙げているので、「窮死」など晩年の作の評価は、勝本発言とさほど隔たりのあるものであったとは思えない。

このように、「窮死」は、いわば不遇な位置に身を置き続けてきたわけであるが、実作者の側からの強い支持があったことも事実である。その代表的な例は、よく知られているように、芥川龍之介である。芥川は、「河童」(昭2・3)の中で、「これは国木田独歩です。慄死する人足の心もちをはつきり知つてゐた詩人です。」と記している。晩年の芥川の自殺者に対する一種独特の崇拜⁽¹⁾を除いたとしても、芥川が独歩を、とりわけ「窮死」を高く評価していたことは、まず間違いない。また、志賀直哉も「文芸」(昭31・9)の「作家推奨名作選」で、「すぐれた短篇小説」として「窮死」を取り挙げ、「もう、五十年位以前の作品なのだが、国木田独歩のこの作品は、決して古いといふ感じを受けない。最近私は、フォークナーの作品を読んで、そのあとで、この『窮死』を読みかへしたが、すこしもかはらぬ、新鮮な印象だつた。フォークナーの作品よりずっと上だと思つた。独歩の作品の中では、あまり問題にされてゐないやうだが、私は、これを、非常にすぐれた作品だと今でも思つてゐる。」と記している。

独歩、芥川、志賀と記すと、同じ短篇小説のすぐれた書き手としての系列をたどることになるが、右の事実は、名もない一庶民のスケッチを軸にした「綱走りまで」(明43・4)で実質的な出発をした志賀の、独歩に対する共鳴の深さを示すものである。

以上は、「窮死」の評価史についてのおおよそであるが、最近、平岡敏夫氏が、この作品を「独歩後期の代表的な短篇であり、独歩文学の帰結を示すすぐれた作品である。」⁽²⁾という積極的な肯定を行ふなど新しい動きがあることは特に注目すべきであろう。

ここでは、こうした「窮死」の従来の評価をも視野に入れ、この作品にみられる対の構図を手がかりとして、「窮死」の特質を明らかにしていきたい。

二

独歩の処女作「源叔父」(明30・8)は、生国が紀州であるという点で、紀州と人々に呼ばれた身よりのない薄幸の乞食少年と、社会の外に葬り去られた源叔父との交流を描いたものであった。「窮死」もまた、「自分が何処で生れたのか全く知らない、両親も兄弟も有るのか無いのかすら知らない、文公といふ称呼も誰いふとなく自然に出来た」肺結核を患う浮浪者が主人公である。

「窮死」執筆中に、独歩が「源叔父」を胸中に想起したかどうかは別として、「窮死」の主人公は、紀州のその後を彷彿とさせるものがある。「佐伯町付属の品物の様に取扱はれ」ていた紀州に、暖かい手をさしのべたのは「有るか無きかに思はれ」ていた源叔父であるが、文公は、「けちなめし屋」に集まる下層労働者すべてから手をさしのべられる。作品の冒頭は、まず、こうした文公に対する暖かい同情を示す会話によつて展開される。

『文公、そうだ君の名は文さんとか言つたね。身体は如何だね。』

『そう気を落すものじゃアない、しつかりなさい』

『苦しさをうだ、水をあげやうか。』

『水よりか此方が可い、これなら元気がつく』

『一本つけやう。矢張これでないと元気がつかない。代価は何時でも可いから飲つた方が可からう。』

『何に文公が払へない時は自分が如何にでもする。エッ、文公、だから一ツ飲つて見な。』

以上は、文公の会話二箇所を除いた残りの会話を、順に冒頭から抽出したものである。発話者は、「九段坂の最寄」にある「けちなめし屋」の亭主、おかみ、お客である「土方か立んぼう位の極く下等な労働者」である。これらの人々は、結核で胸を冒され、「どうせ長くはない」「苦しい咳息」で言葉も出ない三十前後の男に、一つ不平も抱かず、皆がみな元気づけの言葉をかける。「代価は何時でも可いから」といい条、誰一人、文公が健康を回復し、それを返す可能性などほとんどないことを知っている。「文公のお蔭で陰気勝になる」のに、それさえ誰一人として不平に思う者はいない。こうしたありようは、同じ仕事仲間であった弁公親子の言動とほとんど変わらない。

どこへ行くにもあてのない文公は、小雨の中を「穴だらけの外套を頭から被」り、めし屋を後にする。悪寒と苦しい咳に耐えながら、文公はふと二月前に日本橋近くで一緒に仕事をした時知り合いになった弁公のことを思い出す。

次に挙げるのは、他に行くあてもない文なしの文公が訪ねて来たことを知り、息子弁公を諭す父親の言葉である。

『弁公、泊めて遣れ、二人寝るのも三人寝るのも同じことだ。』
『他人事と思ふな、乃公なんぞ最早死なうと思つた時、仲間の

者に助けられたなア一度や二度じゃアない。助けて呉れるのは何時も仲間中だ、汝も此若者は仲間だ助けて置け。』

ここでは、冒頭の「けちなめし屋」で展開された会話から帰納されるものよりも、さらに一步踏み出した時点で、はつきりと、下層労働者の連帯そのものが語られている。結核のためにあえぐような息をする文公を見て、弁公は文公の「長くはない」ことを知るが、弁公の親父は、「だから猶ほ助けるのだ。」と忠告し、「他人事と思ふな」と諭す。弁公の親父は、文公の現在が決して文公一人のものでなく、他ならぬ下層労働者すべてのものであることに気づいているのである。

「源叔父」においては、源叔父と紀州といった個と個との交流が中心主題であったが、「窮死」では、文公に向けられる複数の人々の暖かい救いの手、個とそれを取り巻く集団の愛が描かれている。ここには、確かに、独歩文学の新しい展開ともいふべき「下等な労働者」の「善意・好意」「連帯意識」が示されているのである。

しかし、先に引いた会話に象徴される思いやりやさしさやが、現実から遊離した、いわばリアリズムの世界から遠いものであることは、ことさらに説明するまでもない。たとえば、「窮死」が発表された「文芸倶楽部」の同じ号に掲載された江見水蔭の「蛇窟の踏切」の主人公露代は、結核発病後、下宿からは「唯知合の間柄で、実は、肺病の殉死を遂げるのは免じて貰ひたい」と言つて、無情にも追放され、実の姉にさえ、「厭な、冷めたい、苦々し気な、軽蔑をも含み、恐怖を添へた」「形容の出来難い顔で」見られるのである。伝染性の、当時不治の病として恐れられた結核といった粹組みを取りはずしたとしても、右に記したような労働者同士の連帯がありえ

たかどうかは、もちろん疑問である。

それならば、いわば捨えものとも思える非現実的な場面設定は、いかなる意図のもとになされているのであろうか。

三

「窮死」は、一見科白のみで成立しているシナリオの感を抱かせるが、場面そのものも整然と四区分出来、いわば戯曲のスタイルを持つ。その四つは、先に示した「九段坂の最寄」にある「けちなめし屋」の場面、弁公親子の住む「薄鉄葺の棟の低い家」での場面、および「市の埋め立て工事」の場面、「新宿赤羽間の鉄道線路」の場面である。これら四場面のうち、前三場面と最終場面とは、内容上で大きく区分出来、特に冒頭の場面と最後の場面は対立しており、いわば対の構図を持つといつてよい。

たとえば、最後の場面で展開される会話は、次のようなものである。

『二時の貨物車で轢かれたのでしよう。』と人夫の一人が言うた。

『その時は未だ降つて居たかね?』と巡査が煙草に火を点けながら問ふた。

『降つて居ましたとも。雨の上つたのは三時過ぎでした。』

『どうも病人らしい。ねえ大島様。』と巡査は医師の方を向いた、大島医師は巡査が煙草を吸つて居るのを見て、自身も煙草を出して巡査から火を借りながら、

『無論病人です。』と言つて轢死者の方を一寸と見た。すると人夫が

『昨日其処の原を徘徊して居たのが此野郎に違ひありません。たしかに此の外套を着た野郎ですひよろ／＼歩いては木の蔭に休んで居ました。』

ここで展開されている会話の主は、二人の人夫、巡査、医師の六人である。これらの会話と先に引用した冒頭での会話とを比較して見る時、両者の落差はいかにも大きい。「身体は如何だね」「しつかりなさい」といった「けちなめし屋」に集まった人々の暖かいまなざしはここにはない。ましてや、「長くない」から、それゆえにこそ「猶ほ助けるのだ。」という弁公の親父の思いは皆無である。特に、「昨日其処の原を徘徊して居たのが此野郎に違ひありません。」という言葉は、「他人事と思ふな、乃公なんぞ最早死なうと思つた時、仲間の者に助けられたなア一度や二度じゃアない。助けて呉れるのは何時も仲間中だ、汝も此若者は仲間だ助けて置け。」と文公を狭い三畳間に泊めた弁公の親父と同じ下層労働者階級の、同じ「仲間」の人夫の言葉でもあるのだ。

冒頭の世界を根底で支えているのは、「けちなめし屋」に集まる下層労働者同士の愛であり、同じ労働者としての連帯感であった。それゆえ、登場する人物すべてが善意の人、好意ある人として描かれていた。しかし、先にも触れたように、そうした世界が社会現実の實質から遠いものであることは言うまでもない。現実性という点では、最終場面の方がはるかにリアリティがある。そうであるなら、冒頭の場面は、非現実ゆえに、「窮死」という文学空間から浮上してしまうのであろうか。

この点を明らかにするために、いささか迂遠な方法ではあるが、作品「窮死」と書き手である独歩とのかわりについて、少し触れ

ておきたい。

独歩は、この作品の成立について、次のように記している。

余は『窮死』の結末に於いて、「どうにも斯うにもやりきれなくて倒れた。」と言へり。自殺者の心事を説明するに、何程考ふるのも他に適當なる言葉なく、空しく二日を費して漸く考へ得たるは即ち此一句なり。或日久久保へ帰る途中にて悲惨なる斃死者の最後を自撃して、帰途余は彼の心事を思ひて、ホロ／＼と泣きながら家に帰れり。其時の感想を材料として、自殺者の余儀なき運命を描きたるが即ち『窮死』一篇なり。筆を執つても余は泣きつゝ書けり。

このいささかオーバーとも思える内面露呈も、独歩の当時の実情を思えば、うなずけなくもない。ここで記されている斃死事件が事実であったことは、独歩の友人吉江孤雁の記した追悼文⁽⁷⁾によつても確かめられるが、当時の独歩について、吉江は「久久保に來られる前、即ち独歩社時代から始終喉が痛いと云つて居られた。そして夕方は何時⁽⁸⁾も定まつて発熱する。其時分からして、何所か空氣の好い処を選んで、二三ヶ月静養せねばならぬと云つて居た。独歩社解散後久久保に來られたのは、東京の中でも一番空氣が好いと云ふので、それで軛地のやうなつもりで來たのである。今考へて見ると、其頃から心の中に、余程淋しさを感じて居たやうに思へる。夕方など話しに行く⁽⁹⁾と、『今日、朝早く起きて、幾年ぶりで自然界に彷徨ひ、自然にゆつたりと包まれたやうな氣がした、そして朝の戸山ヶ原に立つて、青葉若葉の香ひを嗅ぎ、蒼茫極らない空を見て居ると、孤独の感に堪へないで、ホロ／＼涙がこぼれて堪らなかつた。』と云はれた。」と記している。この一文は、明治三十九年、近事画報社の

あとを受け独歩社を興しながらも、資金調達に追われ、翌四十年、経営不振のため破産、さらには、経済的逼迫に加えて、健康を害し、不治の病となつた肺結核の徴候が現われ始めるといつた晩年の独歩の苦惱と孤独とを余すところなく伝えている。

「窮死」の主人公文公の抱く「絶望的無我」は、おそらく、書き手独歩の執筆時の内面と緊密に重なつているのである。独歩の『どうにも斯うにもやりきれなくて倒れた』云々の言を韻味して貰ひたし」ということばには、悲痛な思いが込められていたはずである。「窮死」執筆時の独歩の心境を捕捉した上で、冒頭部分を読み返すならば、文公を取りまく人々のやさしさや愛やが、独歩のかくあつて欲しいという願望を暗に示しているのではないかという思いさえする。「長くあるまい」という思いは、独歩その人の悲痛な実感に裏打ちされたものであつたであらうし、「絶望的無我」は、独歩の内部に「霧のやうに重く」たちこめていたにちがいない。「窮死」と同時期に発表された『濤声』（明40・5）の序詩「秋の入口」に記された「要するに悉、逝けるなりノ」「哀し、哀し、我こゝろ哀し。」という悲唱とひびき合う世界がここにあるといつてよい。

四

しかし、独歩は、現実を生きる生活者であると同時に作家でもある。作家としての独歩は、冒頭部に描かれた善意の世界、自らの願望の世界に歩を留めはしない。いかに善意の限りを尽くしても救済されぬものは救済されない。「窮死」の後半部は、現実を生きる独歩の願望を、作家としての独歩が拒絶することによつて成立している。

飯田町の狭い路地から貧しい葬儀が出た日の翌日の朝の事である。新宿赤羽間の鉄道線路に一人の犠死者が発見つた。

犠死者は線路の傍に置かれたまゝ、薦が被けて有るが頭の一部と足の先だけは出て居た。手が一本ないやうである。頭は虫にまみれて居た。六人の人がこの周囲をウロ／＼して居る。高い堤の上に兎守の小娘が二人と職人体の男が一人、無言で見物して居るばかり、四辺には人影がない。前夜の雨がカラリと暗つて若草若葉の野は光り輝いて居る。

「飯田町の狭い路地から」出た貧しい葬儀は、弁公の親父の葬儀である。弁公の親父は、市の埋め立て工事で、下水用の土管を埋めるため、深い溝を掘っていた。ところが、ちょうど通りかかった、紳士を乗せていた衣装の立派な車夫のすねに、はね上げた土があたつてしまった。車夫と親父はつかみ合いになり、血気の車夫は苦もなく親父を溝に突き落とし、親父は運悪く「後腦を甚く撃ち肋骨を折つて」「閻絶」したのである。

第三場面は、以上要約したような弁公の親父の死が中心に描かれており、作品中最も動的な部分である。と同時に、全篇中最も重要な科白があることも見逃すわけにはいかない。それは「衣装も立派」な車夫に向かって叫んだ弁公の親父の「土方だつて人間だぞ、馬鹿にしやがんな」というものである。この科白は、下層労働者、つまり弱者の側から発せられた、腹の底からの怒りであり抗議である。この言葉に触発され、「付近に散在して居た土方」は結集し、車夫を殴打し交番につき出す。どろまみれになって「深い溝を掘っていた親父と「車も衣装も立派」な車夫という対の図式、およびそれからの発展としての土方の決起は、この作品をプロレタリア文

学に近いものにまでしている。ただし、下層労働者の怒り、抗議は、たとえ衣装が立派であつたとしても、社会構造の上では、同じ労働者である車夫に向けられるだけで、社会構造上の矛盾を撃つところにはいかない。むしろ、階級的自覚といったところにもいかない。この辺りに、情情的に弱者の側の論理に立ちながらも、社会的視野の高みにまで行くことの出来なかつた独歩の限界もあるわけであるが、この作品は、独歩の可能性を示し得た、独歩文学の新たな展望を拓くものであつたことは間違いない。

犠死者は、いうまでもなく文公である。「さて文公は何処へ行く？」と繰り返して記されたその行末は、新宿赤羽間の鉄道線路——「自らの生命を自らで断ち切つた——」であつたのである。「如何にも斯うにもやりきれなく」なつて死を選んだ文公を、独歩は次のように冷やかに記す。

『何しろ憐れむ可き奴サ。』と巡査が言つて何心なく堤を見ると見物人が増へて学生らしいのも交つて居た。

此時赤羽行の汽車が朝日を真ともに車窓に受けて威勢よく駆つて来た。そして火夫も運転手も乗客も皆な身を乗出して薦の被けてある一物を見た。

此一物は姓名も原籍も不明といふので例の通り仮埋葬の処置を受けた。これが公文の最後であつた。

実に人夫が言つた通り文公は如何にも斯うにもやりきれなくつて倒れたのである。

冒頭に記された大勢の暖かいまなぎしに包まれた文公は、ここでは、それらすべてを無に期すかのように「一物」として表現されていくだけである。「薦が被けてある」「一物」は、「頭の一部と足

の先だけは出て居た。手が一本ないやうである。頭は血にまみれて居た。」と、非情とも思える文体で描写される。「ホロ／＼と泣き」「筆を執つて余は泣きつゝ書けり」といった独歩の直情は、作品の中ではいっさい断ち切られている。

善意の人々に取りかこまれ、暖かい救いの手をさしのべられた文公も、暖かい手をさしのべた弁公の親父も、ともに非業の死を迎える。それは、いふなれば、敗残の人生そのものである。冒頭で展開された会話と最終場面で繰り広げられた会話との落差、主情を拒絶した冷やかな客観描写を通して、いかに救いの手をさしのべても、その愛が酬われるとは限らない、否むしる酬われぬことの方が多いという深刻な主題が鮮やかに紡ぎ出されているのである。

以上のようにたどつてくると、冒頭と最終場面との対の構図は、主題を導くための必然であったといつてもよい。つまり、冒頭で展開される会話が愛に充ちたものであればある程、後半の悲劇は、その深刻さを増しているのである。いささか奇妙なもの言いになるが冒頭の反リアリズムが、後段のリアリティを、ひととき鮮やかに際立たせているのである。

そういえば、「源叔父」の主題もまた、源叔父がいかに救いの手をさしのべても、紀州はその愛に何ら応えることなく、ついには、源叔父は縊死してしまふというものであった。

五

「窮死」における対の構図は、大きくは、先にみたように、作品の構造上でのものであるが、これに連なるかのように、多くの対を

挙げることが出来る。そもそも、この作品は、「西の空が真黒に曇り、遠雷さへ轟きて只ならぬ氣勢けしき」から始まり、「前夜の雨がカラリと晴つて若草若葉の野」が「光り輝いて居る」場面で閉じられる。また、「衣装も立派」な車夫と泥まみれの弁公の親父という対立がこの作品の重要なモメントであることは先に示した。しかし、「窮死」の中で最も深い意味が背後にあるのは、実は、先に挙げた引用文中にさりげなく記されていた、次のような一文である。

『何しろ憐れむ可き奴サ。』と巡査が言つて何心なく堤を見たと見物人が増へて学生らしいのも交つて居た。

ライブクネヒトを読む大学生を点出した芥川の「玄鶴山房」(昭2・1(2))とまではいかないが、「窮死」に数多く散見する対の構図を思う時、「見物人」中の「学生」は、思ひの外重い意味を担っていると考えられる。

確かに、「書生書生と軽蔑するな末は太政官のお役人(明治六年)」と歌い出された「書生節」が、明治三十年代に至り「書生書生と軽蔑するな家へ帰れば若旦那」と替えられているように、書生(学生)そのものの社会における位置も変質している。歴史的にみれば、明治十九年三月に発布された「帝國大学令」に始まる学生の量的拡充、さらには、それに伴う立身出世の夢の後退、といったさまざまな要素が、こうした変質を生み出していったわけであるが、しかし、にもかかわらず、「窮死」に点描されている「学生」が、下層労働者文公の人生とは全く異なった人生を歩むのは確実なのだ。

「窮死」が発表された明治四十一年の前年に発表された白柳秀湖の「暇夫日記」には、たとえば、次のような一節がある。

私は毎朝此青年の立派な姿を見る毎に、何ともいはれぬ羨し

さと、また身の羞しさを覚えて、野鼠のやうに物蔭にかくれるのが常であつた。永い間通つて居るものと見えて、駅長とは特別懇意でよく駅長室へ来ては巻煙草を焼べながら、高らかに外国語の事などを語り合ふて居るのを聞いた。

私の眼には立派な紳士の礼服姿よりも軍人のいかめしい制服姿よりも、此青年の背広の服を着た書生姿が、云ひ知らず心を惹いて堪えられない苦痛であつた。私は心から思ふた、功名もいらぬ、富貴も用はない、けれども只一度此脂垢の潤みだした夫の服を脱いで学校へ通ふて見度い……

「功名もいらぬ、富貴もいらぬ、けれども只一度此脂垢の潤みだした夫の服を脱いで学校へ通ふて見度い」という痛切な思いは、文公に代表されるような住所不定の日雇労働者の独白ではなく、定職を持つ青年駅夫の呟きであるのである。この主人公が、たとえ、小学校を首席で卒業しながらも、経済的不如意のため、進学の道を断たれてしまったという事情を差し引いたとしても、「学生」がやはり選ばれた人であることに変わりはない。また、「富岡先生（明35・7）中の細川は『我若し学士ならば』といふ一念を去ることが出来な」かつたのではないか。

これらの例は、「窮死」が発表された明治後期における「学生」の社会的位置の変質といった点を考慮に入れても、なお、社会の底辺層に生きる人々から見た「学生」の位置がいかなるものであつたかを、はっきり示している。そうであるならば、社会の底辺層に位置し、結核に冒され、自らの生命を自ら断ち切つた文公と「学生」との距離はいかにも大きい。「如何にも斯うにもやりきれなく」なつて、「堤から転り落ちて線路の上へ打倒れ」慥死した文公の死体

を眺める見物人中の「学生」は、冷酷ともいうべき客観描写と相俟つて、文公の悲劇をいっそう増幅させるために配されているのである。

独歩は、さまざまな死を描いた作家であるが、それはともすれば浪漫的情調に流されるきらいがあり、作品の迫真性をそぐことにもなつた。たとえば、先に述べた「源叔父」の死も、文語体小説といつた枠組みを取り去つたとしても、やはり浪漫的色彩に包み込まれていたし、「春の鳥」（明37・3）の六蔵の死は、「鳥のやうに空を翔け廻る積りで石垣の角から身を躍らしたものだ」としてとらえられ、むろん天主台から落下した六蔵の死体は描写されはしない。

「窮死」と同じ人生の敗残者を扱つた「河霧」（明31・8）の主人公は、死を暗示する感傷的な一文「豊吉は遂に再び岩——に帰て来なかつた。」に封じ込められていた。

しかし、「窮死」の主人公の死は、これらの作品の描出されたいかなる死よりもリアリティがある。芥川、志賀といった実作者の側からの強い支持は、おそらく、この迫真性に深いかかわりがあるとみてよい。「悲惨が悲惨に響かぬのが第一の欠点。」というのは「文章世界」の批評であつたが、この作品にみられる対の図式を一つひとつ読み解く時、文公の死の悲惨さは、十分読者に伝わってくるよりに思える。確かに、文公の慥死、とりわけ弁公の親父の死など「唐突」とみなされる一面があるのは否定出来ないが、それぞれが緊密に連関し合ひ、「窮死」一篇の主題に鮮やかに収斂されているのも事実である。

「多くの歴史は虚栄の歴史なり、パニティーの記録なり。人類眞の歴史は山林海浜の小民に問へ、哲学史と文学史と政權史と文明史の外に小民史を加へよ、人類の歴史始めて全からん。」(『欺かざるの記』)と独歩が記したのは、作家的出発に先立つ明治二十六年三月二十一日であった。この一文を叙した際に、どの程度熟したものと見て、「小民史」が意識されていたかどうかは定かでない。しかし、今日、独歩文学をトータルな形でふり返つてみる時、「小民史」といった言葉に表徴される文学理念を根幹として、誠実な作家的営爲が展開されたことははっきりしている。処女作「源叔父」から、最後の作品となった「二老人」に至るまで、独歩は一度も「小民史」の意識から遊離したことはない。さまざま小民のさまざまな生き方を描くことによつて、自らの哲学的命題であつた「我は何処より来りし」「我は何処に行く」「我とは何ぞや」という解き難い問いを問ひ続けたのである。

しかし、独歩の「小民史」が、その出発から問題を孕んでいなかったというわけでは必ずしもない。たとえば、独歩の描出する小民が、「社会を媒介することなくただちに『如何にして此天地間に此生を托すべきか』というふうな詩的に飛躍」してしまつたために、「近代的な国民文学としての豊熟に達することなく終つた」といった批判は、問題のありかを見ごとに指摘したものの代表的なものである。

このことを最もよく表しているのは、「忘れえぬ人々」(明31・4)であろう。この作品は、大津の思念を紡ぎ出すために、「小民」

は点景として描出されているに過ぎず、「小民」の生活現実はいつさい捨棄されてしまつていたのである。社会の片隅に生きる名もなき民は、知識人、いわば「学生」の側から観念的にとらえられているわけで、「小民」は点出されているが、「小民史」に連なる「小民」の現実を描かれていないという結果に終つてゐる。むしろ、「小民史」が眞の「小民史」となるためには、作家独歩が「小民」の生活現実のレヴェルにまで下り立つことが必要であることは言うまでもない。

すでに指摘したように、「窮死」においては、作者の視点は、文公、つまり弱者の視点に重なつてゐるのであり、独歩と「小民」との距離はほとんどない。見物人中の「学生」に象徴されていたように、知識人としての高みからの視点はここにはない。いわば「窮死」は、「忘れえぬ人々」の構造と逆の構造によつて成立しているのである。

「小民史」といった観点から独歩文学全体を俯瞰する時、「窮死」までの展開は、実は、「小民史」完成までの艱難の道のりであつたといつてよく、「窮死」は独歩の「小民史」の帰結を示す作品でもあつたのである。

(注(1)) たとえば、芥川が遺書の中に自殺した哲学者マインレンデルを記していることなど、よく知られている事実である。

(2) 志賀の独歩受容に関しては、紅野敏郎氏のすぐれた考察「日本の短篇小説——その位置と特質——」(『国文学』昭44

・6)がある。

(3) 『短篇作家・岡木田独歩』(昭58・5)

- (4) 平岡敏夫「短篇小説の鑑賞『窮死』」〔国文学〕昭44・6)
- (5) 「蛇窪の踏切」の主人公も、「窮死」の主人公と同じく懨死するわけであるが、兩懨死事件を取り挙げ、時代の様相にまで言及したすぐれた論考が、平岡敏夫氏の「三つの懨死」
- 〔日露戦後文学の研究(上)〕昭60・5所収)である。
- (6) 『病床録』(明41・7)
- (7) 「新潮・国木田独歩号」(明41・7)
- (8) 「我は如何にして小説家となりしか」〔新古文林〕明40・1)
- (9) 小田切秀雄「独歩と啄木」(岩波講座『文学』昭29・5)

〔付記〕独歩の文章の引用は、全て学習研究社版、国木田独歩全集によった。なお、引用に当たっては、旧字体の漢字は新字体に直し、ルビは必要のものに限った。

— 広島文教女子大学助教授 —